『新版画　進化系　UKIYO-E の美』展関連ボランティア企画

♡　新版画を楽しもう　♤

プロローグ　新版画誕生の背景　８階

◇　№５，６，７，８　山本昇雲

《今すがた
　　酔いけしき　花やしき
　　すずしの顔　絵まきもの》

―絵空事だから楽しい世界
明治生まれの昇雲は、当時のモダンガールを５４枚の版画に登場させた。
今すがたを現代訳するとモダンガールになるそうだ。ここではその内の４枚が展示されているが、どの女性も江戸時代の浮世絵の面影を引き継ぐ、ふくよかな表情をしている。中枠の外にはモダンガールたちの憧れや思いが描かれる。
入れ子のような演出がこの時代の新しさを表しているのだろうか。度重なる身内の不幸を経ても生涯、穏やかで温かい筆遣いは変わらなかった。（S.A）

♧　№１０　高橋松亭　《和泉ばしの夜雨》

―時代と共に
斜めに降る雨の中を蛇の目傘と提灯を手に急ぐ人々。江戸の光景を思わせますが、全体に二色で整理された色彩、橋と傘の曲線、欄干や橋げたの直線、斜めの雨脚の組み合わせが画面にリズム感を産んでいます。ノスタルジックでありながら近代的な画面構成のこの作品は、渡邊庄三郎が後につくり上げる新版画の作品世界を予感させます。
明治・大正・昭和と描き続けた松亭は、後に弘明名で大胆な裸婦像（№120）や猫（№121）の作品を物します。（S.N）

第１章　新版画、始まる　８階

◎　№１８　橋口五葉　《浴場の女》

―版元・渡邊庄三郎との新版画の第一作目作品
日本画⇒洋画に転じ漱石『吾輩は猫である』等、数多の装幀を残し、時にポスターを手がけ、再び日本画に挑戦した時期もある。
最後は浮世絵研究と木版画に没頭。多彩な画人。
１００部摺り、庄三郎と五葉が５０部ずつ分け合う。五葉は作品を気に入らなく５０部を全て破棄。庄三郎の手元に残った５０枚のみの稀少な作品。この後、庄三郎のもとを離れる。
その後、私家版を作製し３９歳の若さで亡くなる。新版画作品は僅か合計１３点にすぎない。（K.K）

第２章　渡邊版の精華　８階

○　No.２７　伊東深水　《近江八景　比良》

―心象風景
伝統的な近江八景図とは異なり、作者が実体験した光景を描いたこのシリーズ。
雪のない季節の夕暮れ。突然の夕立ちの前に空に立ち込める暗雲。強い風になびく葦と波立つ湖面。恐怖感をも作者は感じ画にしたのでしょうか。
伝統的な彫摺技術を使いながらも、ギザギザと藍の濃淡で描かれた比良山系と薄茶色に塗られた湖面の色彩が作者の主観を強く表現しています。このシリーズに感動し、川瀬巴水は風景版画の制作を選びます。（S.N）

♤　No.６３　川瀬巴水　《東京十二ヶ月　三十間堀の暮雪》

―版元・渡邊庄三郎とのコラボした雪景色の最高傑作！
２８歳の時、庄三郎に見いだされ新版画に入る。
１９１８年～１９５７年に亡くなるまで約６００点以上の作品を作製。この作品は庄三郎３５歳、巴水３７歳の時の作品。
１２枚の揃ものと企画されたが５図のみで終了。
その内１図以外は円窓型を基調とした作品。庄三郎が吹雪の中、写生する巴水に傘をさしかけ、庄三郎が摺師一斧銀太郎と相談し版木を砥石やたわしでこすり斬新な吹き荒ぶ雪を表現。完成時は皆で肩を叩き合って歓喜した。（K.K）

♧　No.７４　名取春仙　《春仙似顔絵集　五世中村歌右衛門の淀君》

―恨み、怒り、そして狂気？
妖しくすわった眼、歯を食いしばり歪んだ口元、乱れ髪。豪華な着物との対比が異様な表情を一層際立たせている。坪内逍遥作の新歌舞伎以来、五世中村歌右衛門は様々な作品で淀君を演じた。狂乱した淀君を演じる時には精神病院を訪問し、意味なく笑う狂った婦人の姿を観察したという。
「東西随一の女形」歌右衛門の終生の当たり役、迫真の演技が生み出した背筋も凍る様な一瞬の表情を、春仙は鮮やかに描き切ったと感じる。(M.S)

♡　No.４５　伊東深水　《新美人十二姿　春近き思い》

―雪持松に、梅が咲き、桜が咲く着物、蝶の簪、春待つ姿
赤が効果的に画面に置かれ、華やかななかにも安定感があり、色数が多くないことが、表情やしぐさを際立たせています。口元に袂を持っていく様子に娘らしい初々しさが匂い立ちます。眉や頬、頭の傾き、着物の線にみえる姿態、隅々までが美しく、その人を称える優しい作者のまなざしが感じられます。
関東大震災の翌年５月に発表されたこの作品は、まさに表題の「春近き思い」、復興の力強い足音を人々に実感させたに違いありません。（Y.Su）

◇　No.６９　川瀬巴水　《旅みやげ第二集　佐渡相川町》

―今は寂しき夕暮れの町
近世から金山で賑わった相川町も、この作品が描かれたころにはすっかり寂れていた。
夕暮れに佇む老人と孫の姿は、どこまでも私たちを郷愁の世界へといざなう。
心の奥底をぎゅっと捉まれたように感じたら、あなたはもう巴水ワールドにはまっている。行ったことがないのに知っている、もう戻れないあの場所のあの頃。
手を伸ばしても届かないもどかしさの内に巴水の絵画世界がそっと寄り添う。（S.A）

◎　No.８２　山村耕花　《梨園の華　十三代目守田勘弥のジャンバルジャン》

―人間不信の塊ジャン・バルジャン
「梨園の華」12 枚シリーズは山村耕花の代表作ですが、新劇に題材を取った作品はこの１枚のみです。
13 世守田勘弥の風貌は面長で顎のしゃくれが特徴ですがよく出ています。
眉間のしわ、上目使いの鋭い目、乱食い歯、ゆがめた口。パリの貧民窟で暮らすジャンの人間不信ぶりを１３世は見事に体現しています。その一瞬を耕花は画に留めました。ジャンの鋭い目には赤と青が差し色されています。（S.U）

○　№９１　エリザベス・キース　《藍と白》

―ジャパン・ブルー
作者エリザベス・キースは山国日本のような水清くウィスキー産地で有名なハイランド地方スコットランド・アバディーン出身。藍色=ジャパン・ブルーの濃淡表現が見事！
濃紺長身着物姿女性を作品の中心に立たせ、その背景のお店は淡い藍色。移り行く日本の夏の光と大正モダンをジャパン・ブルーの濃淡で見事に表現。隣りに並ぶ中国大陸や朝鮮半島のキース作品に目を移すと、空気が重い。日本はキースにとって故郷の延長だったのでは？（Ma.S）

第３章　渡邊庄三郎以外の版元の仕事　８階

♡　№１０２　吉川観方
《観方創作版画第壱集　成駒屋の紙治　河庄の場》

―薫香漂うような
おなじみ江戸の役者絵とは、色使いから肌の質感まで違う。衣装のこってりとした深い色合いを見ていると、少し渋みのある甘く涼やかな沈香の香りが感じられるよう。
版元は、かつて渡邊庄三郎の仕事仲間だった佐藤章太郎。風俗研究・時代考証家でもあった絵師、吉川観方と組んで、京都の伝統木版の復興を目指した。東の山村耕花、名取春仙らの役者絵と比較してご覧頂くのも一興かと。(Me.H)

♤　№１２５　小早川清　《美女三態　湯上り》

―カラコン!?
　黒髪に着物姿の美人さんを探してみてください！
この作品は昭和初期の木版画ですが、江戸時代の浮世絵の技術を彫り師、刷り師と共に制作し継承しています。また、その作家 小早川の師を遡ると幕末の浮世絵師に行き着くのです。そして、作品の題材に時代のトレンドを切取るという精神を江戸の浮世絵から引き継いでいることからも浮世絵の正統な後継者と言えるようです。
それにしてもこの美人 令和の時代でもイケてませんか？
(S.H)

第４章　私家版の世界　７階

◇　№１２８　橋口五葉　《化粧の女》

ー歌麿へ捧げる大首絵
浮世絵研究と膨大な量の裸婦スケッチが結実した傑作である。何を想いながらの化粧なのか目元と頬骨がほんのりと赤い。髪の生え際は立体感を出すために２版を重ね、ほつれ毛も墨線と空摺りで表現されている。それにしても黒々と艶のある髪だ。うなじから肩先への曲線、白粉刷毛を持つ指先、柔らかそうな肌、なんとも色っぽい。手鏡や指輪には金を。高価な墨や絵の具を使用し、用紙も肉厚で空摺りが美しい。隅々まで見て頂きたい一枚である。（S.U）

♧　№１４１　山村耕花
《踊り　上海ニューカルトン所見》

－スタイリッシュで洗練された大正期の
　　一世を風靡したモガ達！
名取春仙と同様に役者絵を描く。彼の役者絵は容貌を誇張－デフォルメーして描くので大正の写楽と言われていた。１９１４年には創作版画にも参加。書籍の装幀や小説の挿絵を行う。
関東大震災後１９２３年には庄三郎のもとを離れた。
１９２４年に私家版にて役者絵以外に上海の国際都市の租界ニューカルトンのダンスホールで踊る人々と洋装で断髪のモガ達の風俗等を描いた。
２０２２年の千葉市美術館の友の会のご案内の表紙に使用している。（K.K）

◎　№１６４～１６９　吉田博
《帆船　朝・午前・午後・霧・夕・夜》

ーどれが好き？
同じ版木を使い色を変える「別摺」で６種類のヴァリエーション。同じ海でも時間や天気でこんなにも違うのか！と表現の豊富さに驚かされる。
大正 10 年に渡邊版にて３種類出版されていたが関東大震災にて焼失。私家版でより静謐な表現を求めて制作されたのがこの６点。
『霧』の空気感は渡邊版新版画の特徴である「ザラ摺」で表現されている。『午前』の帆にも見られる摺りなので、他にどこで使われているか探すのも面白い。『朝』の太陽の光には手術用の焼切メスを使い自刻したそうだ。（Ma H）

○　№１７２　吉田博　《雲井櫻》

―大きな版画は大変なんです
ほぼ画面中央の月に照らされ、青みがかった薄闇に浮かぶ花盛りの枝垂れ桜と和装の女性たち。夢のような、幽玄な世界が描かれている。水彩画であれば珍しくない長辺 70ｃｍ余りのサイズだが、木版画では実は破格の大きさ。桜の古木の版木を入手し制作に及んだが、その大きさから摺りは困難を極めたとか。濡らした紙の収縮率と版木が合わず、枝と桜の図柄がずれてしまい、二人の摺師が同時に作業することでようやく成功したという。(Me.H)

ヘレン・ハイドとバーサ・ラム　７階

♡　ヘレン・ハイド
《くたびれた小さな母さん》

―部屋に飾るならこの絵かな♪
優しい色合いの花が流動的な丸い輪郭線を描き、その真ん中で着物を着た女の子が赤ん坊をおんぶして、ひと休みしている…傍にはピンクの洋傘が置かれていて、日本と西洋、古さと新しさが混じったような懐かしい風景である。
ヘレンは、彫師・摺師を雇い、伝統的な技法に自らの感性で手を加え、新しい作品を作った。
木版画第一作目は版元小林文七の元で制作している。渡邊庄三郎が文七の元で修業を積む前の出来事である。（Ma.H）

♤　バーサ・ラム
《隆福寺、中国の骨董市》

ー似てるけど、どこか違う、、
２つの作品を比べてみてください。日本滞在中に浮世絵の手法を学んだアメリカ生まれの女性作家の作品です。隆福寺は中国北京にあった寺院で現在は火災で焼失。当時は北京でも有数の市が出ていました。
ラムの中国滞在中、木版多色刷りの制作は難しかったようです。同じ木版を使っているように見えますが、制作過程はどう違うのでしょうか。ここを刷ってこうすると、、と見るのも楽しいかもしれません。（S.H）